

クロス ヘッド

桑原一世

kuwabara ichiyo



クロス ロード

桑原一世

kuwabara ichiyo

集英社

クロス・ロード

一九八八年一月一日 第一刷発行

著者 桑原一世（さんば いち）

装丁 菊地信義

装画 木村繁之

発行者 堀内末男

発行所 集英社（しゅへい）

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

出版部（〇三）二三〇一六一〇〇
販売部（〇三）二三〇一六一七一

製作課（〇三）二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

定価 八八〇円

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複製、転載することを禁じます。

初出誌「すばる」

「クロス・ロード」

一九八七年十二月号

第十一回すばる文学賞受賞作

クロス・ロード

改札をぬけ、銀座通りを足早に通ると、ぼくは交差点で立ちどまった。左手に渡れば、なだらかな丘陵地帯があり、ぼくの家がある。右手に渡って少し歩くとラブホテルの並ぶ幅広のドブ川があり、その先をさらに行けばコンクリートの堤防の向こうに海が見える。ぼくは辺りを見まわしてから、右手の信号を渡り、川向こうへの道を急いだ。川の辺りまでくると、ぼくはいつもほっとする。川を越えれば母の知りあいは誰もいない。橋を渡り、ゆるやかな坂道を下ると、埋立地へと続く広い通りに出た。

通りには以前、工員めあてのちっぽけなスナックやバーが林立していたが、不況で埋立地の工場が閉鎖、休業に追いこまれてからは大方取り壊されてしまった。時代の

波よね、埋立てられた頃は高度成長が永遠に続くと思ってたもの、もったも空気
がこんなに汚れるとは誰も思わなかったけどね、と母は言っていたが、はたして時代
の波のせいなのだろうか。こんなふうになるとは本当に誰も思わなかったのだろうか。
取り壊された跡地に、二軒のゲームセンターとレンタル・レコード屋、それにサム
の店ができた。それらの店はひとかたまりに寄りそって建っているが、三方をとりま
く空地におされて頼りなく見える。

ぼくは制服の黒いズボンから湿ったハンカチをとり出すと、額と両腕の汗を拭った。
ゲームセンターの隣には、冷蔵庫やテレビなどの電気製品の残骸や自動車の古タイヤ、
雑誌や新聞などがうずたかく積まれている。清涼飲料のアルミ缶のきらきらした光、
読み捨てられたばかりの漫画雑誌のまだ鮮やかな印刷……。通りはガランとして、ハ
ンカチに染みる汗の音まで聞こえてきそうだ。かつて大型トラックが地響きをたてて
通った道を、いつもはときおりバイクや小学生の自転車が駆けぬけるが、薄暗い店内
でゲーム機にかじりついていた小学生たちは、みなどこに行ってしまったのだろうか。
通りの両側がところどころ黄色に揺れている。セイタカアワダチソウが放置された建

材の破片の間から勢いよく伸びていた。ある日突然サムの店もこの黄色い花に覆われてしまふかもしれない……。

ぼくは体にぐったりとからみつく、かすかに潮の匂いのする風を感じながら、過去と未来にどのみちたいした違いはない、と思った。あるとすれば未来より過去のほうが長生きすることぐらい。記憶の廊下は一日ごとに長くなり、未来はどんどん削られ失われてゆく。トオルとジョンは今、廊下のどのあたりにいるのか。ジョンは去年の夏に死んだ。トオルはこの正月に死んだ。たった一年前とわずか八か月前の死。それなのにまるで歴史上の人物の死のように感じる。ぼくはトオルの残した日記をときどき広げ、母がうるさく言ってもジョンの犬小屋を壊さない。だが彼らはぼくから遠ざかっていく。参考書、問題集、試験、母の愚痴……。新しい退屈な過去に追われて、廊下の奥に押しやられていく。人は忘れる。罪を忘れ、悲しみを忘れ、自分のことさえ忘れる。黄色のペンキでサム・ザ・ライオンと英語で書かれたこの店のことも、ぼくはいつか忘れるのだろう。

サム・ザ・ライオン。みんなはサムの店と呼んでいるが、「ラスト・ショー」という映画の登場人物の渾名だ。砂嵐の吹きつけるテキサスの小さな田舎町で、ちっぽけな映画館や玉突き場などを経営するサム・ザ・ライオンは、少年たちのヒーローだった。

サムの店のマスターはこの映画が好きで、こいつにあわなければ今もコンピュータをいじっていられたんだが、とわざとらしく嘆く。二度目にサムの店に行ったとき、「ラスト・ショー」って映画、見たことがあるか、とマスターにたずねられた。ぼくが首を振ると、いい映画だぞ、これから見てみないか、と誘われた。そして、ぼくはマスターのプライベートなビデオ上映会の常連となった。

常連となったのは映画が気に入ったせいだが、もう一つ理由があった。初めてその映画を見た頃、マスターの大学時代の友人の後藤さんが、こう言って笑った。彼は狂信的だから、気にいった人に会うと必ずあの映画を見せるんだよ。ぼくなんか、もう二十回以上もつきあわされたものな。それを聞いてぼくは背筋がぞくぞくするほどうれしくなったものだ。後藤さんと同じようにマスターに映画を見せられたことで、ぼ

くは一人前のレッテルをベタリと背中に貼られたような気がした。それで、ぼくも二十回は見なくちゃ、そう決意したのだが、まだ六回しか見ていないし、たぶん七回目の今日が最後だ、と思う。

ズボンにてのひらの汗をこすりつけると、ぼくはガラス戸を押した。

「よっ、ずいぶん暑いな」 カウンターの向こうからマスターの声がした。ついで、ハチミツをなめたばかりの熊のような髭面がのぞき、ぼくの二倍はありそうな顔がのんびりした表情を浮かべて、ぼくを見下ろした。

「こんにちは」 カウンターに近寄ると、ぼくは跳び箱を跨ぐようにして丸椅子に腰かけ、いつもながら、なぜ、カウンターの椅子はみな、こんなに高いのか、と思った。椅子に跳び上がるたび、ぼくは世界が自分向きにできていないのを実感する。きつと、こんな他愛のない実感が独裁者を育てるのだ。彼は世界中の椅子の脚を切りたくなる。でも、ぼくは宙に浮いた爪先で、カウンターの腹を軽く蹴るだけだ。

カウンターにアイス・コーヒーとトーストを置くと、棚からレコードをとり出さな

がらマスターが言った。

「アキラ君はどこにも旅行に行かないのか。最近は中学生までハワイに避暑に行くんだってな。いったい、どうなっているのかな」

「さあ。ぼくは夏期講習があるから。でも夏休みって、どこに行っても人がいっぱいだもんね」

わが家で海外旅行をしたのは姉だけだった。姉は新婚旅行でグアムに行ったのだ。父と母のハネムーンは別府温泉一泊の地獄めぐりだった。母は、ぼくが大学に受かったら、みんなでハワイに行こうと言っているが……。

「そうだな。ハワイやグアムよりハヤらない喫茶店に行くほうがましかな」とマスターは笑って、プレイヤーにかみこんだ。

ロバート・ジョンソンが歌っている。クロス・ロードにしゃがみこんでも神様は助けてくれない。クロス・ロードで旗を振っても、誰も気づかずみな通りすぎる。だが、ぼくは十字路にしゃがんで、アイス・コーヒーとマスターがおまけにつけてくれたトーストをかわるがわる口に運んだ。与えられた道のどれを選んだところで、今とたい

して変わらないだろう。それだったら、いつそ永遠にしゃがみこんでいるほうがいい。でも、いつまでも十六歳のままでしゃがみつづけることはできない。きつとトオルもそう思ったのだ。それで……。

「今日はぼく一人なの」 ガラス越しの通りは相変わらず静まっていて、猫一匹あくびしそうにない。

「みんな旅行に行ったり、郷里に帰ったりしてるからな。商売あがったりだよ」 商売などまるで気にもかけていない呑気な口調だ。このぶんでは映画のサム・ザ・ライオンのように、三軒の店の経営者にはなれそうにない。玉突き場や映画館は百年たってもできないだろう。

サムの店には通りすがりの客が減多にこない。

初めてぼくがこの店に入ったのは今年の二月だった。ある日の夕方、いつものように改札を抜けたが、まっすぐ家に帰る気がしない。といって行くところがない。銀座通りの喫茶店に入ろうか、と思ったが、アーちゃん、世間の目ってうるさいのよ、という母の声が聞こえる。しかたなく冷たい風に背中を押されるようにして歩いている

うち、サムの店にたどりついたのだ。そのときマスターはぼくをゲームセンターに来た中学生と間違えた。中学生はこんなとこに来ちゃだめだよ……。

サムの店にはブルースや映画の好きな大人の常連客が多い。たいていは後藤さんのようにマスターの親しい友達だ。友達の友達が新しい常連をつくるのでサムの店はやっつていけるのだろう。

「後藤さんは今頃どこにいるのかな」

両手でコーヒーマグのカップを抱える後藤さんはラッコにそっくりだ。後藤さんは養蜂業者で、例年、花の季節が過ぎるとサムの店に顔を出すそうだ。ぼくが、子供の頃、蝶が好きだったと言うと、後藤さんは大きな前歯を見せてニッと笑った。父と同じくらい無口な人なのに、なぜか後藤さんの沈黙は苦にならなかった。

「さあねえ。東北か北海道にいるんじゃないかな」

「いいね、後藤さんは。あっちこっち行けて」

「でも、巣箱をトラックに積んで、花から花へと旅するのは大変だよ。車の振動や排気ガスで蜂が死んだりするらしいから」

マスターは通りに目をやりながら、レコードに合わせて低い声で口ずさんだ。風が吠えてるのが聞こえないかい。台所に入ったほうがいいよ。外は雨になりそうだ……。セイタカアワダチソウが黄色い頭をかすかに揺らしている。しばらくすると、太陽は埋立地の向こうの海に沈むだろう。風は吠えないし、雨は降りそうにない。母は台所で夕食の支度をしている……。

ぼくはマスターから聞いたロバート・ジョンソンの話を思い浮かべた。写真一枚も残さなかったブルースの天才。ハンサムで女たちにもてたが、どんな女にもつかまらなかった船乗りみたいな男。二十歳半ばにして女に殺された気ままな男。彼はギターと歌で自分の一瞬一瞬を歴史に刻みつけ、いかにも天才らしい伝説を残した。ところで凡人はいったい何を残すのだろうか。父と母は何を歴史に刻みつけているのだろうか。ぼくや兄や姉をとおして、ただ子孫を残すだけなのだろうか……。

いきなりオートバイのエンジン音が轟き、空気を引き裂いて鳴りやんだ。そして、目の痛くなるような鮮やかな黄色が、「おにいさん、お客さん連れてきてあげたわよ」とガラス戸を押し開けた。

黄色のTシャツに黄色のホットパンツ、髪までとうもろこしの黄色に染めた背の高い女の子は、片手で扉をおさえると、表に向かつて、「かなちゃん、早くう。冷房が逃げちゃうわ」とにぎやかな声をかけ、振りむくとぼくを見て、「ビンボー喫茶店だもんね」と笑い、「彼女、バッグを落として中身をぶち開けてしまったのよ」とマスタ―に言った。

マスタ―は呆つ氣にとられているぼくに、「女房の妹なんだ。仕様がなないじゃや馬だよ」と小声で言った。ぼくはもじもじして首をカウンターの正面にまわし、棚に並んだグラスを眺めるふりをした。ぼくが呆つ氣にとられたのは彼女のじゃじゃ馬ぶりでなく、すらりと伸びた小麦色の滑らかそうな長い脚、それにつんと突きだした胸だった。ぼくの高校は進学校のせいかな、こんなカッコいいプロポーションの女の子はいないのだ……。

かなちゃんと呼ばれた女の子が「あたしってドジね」と言いながら入ってきた。横目でちらっと見ると、チアガールのような白の短いスカートが目映った。こんなスカートでバイクに乗るなんてどんな女の子だろう。

女の子たちはカウンターに近づくと、ぼくの隣に立ちどまった。

「かなちゃんはクラブの後輩だね。駅前でたまにまたま出会ったの。お父さんがこの町に住んでるので、毎年、夏休みにこっちで過ごすんだって。ほんと偶然よね、かなちゃん。それで映画やるのを思い出して引っぱってきたってわけ」

かなちゃんは切れ長の目をした痩せた女の子だ。腰までとどく長い髪は、マスターに、よろしく、と頭を下げたとき、ふあつと揺れて、空気に見えない絵を描きだした。「みっちゃんの後輩か。かわいそうに。大変な先輩をもったもんだな」

みっちゃんは、「何よ、おにいさんたら」と甘えたふくれっ面をし、ホットパンツに留めつけた小さなバッグからタバコをとりだすと、マスターの顔に煙を吹きつけた。タバコをはさんだ細い指の爪を見ていると、頭がくらくらし、胸がどきどきしてきた。真っ赤だ。二人とも大学生なのだろう。ぼくよりずっと大人に見える。

みっちゃんとかなちゃんか。彼女たちが側にいるだけで、皮膚の裏側が熱い刷毛でくすぐられるような気がする。ぼくは自意識過剰なのだろうか。それとも十六歳の男は誰でも、女の子のそばにいとこんな感覚を味わうのか。……不意にマスターに名

前を呼ばれ、熱い刷毛を持つ手が一瞬止まった。

「こちらはアキラ君、うちのお得意さんだ。かなちゃんと同じ学年だ」

「うそーっ！ 中学生みたい。可愛いーわねえ。ほんとに高校生？」

うそーっ、と言いたいののはぼくのほうだった。彼女たちがぼくと同じ高校生だなん
て……。だが、ぼくは真っ赤な顔でうなずいた。中学生に間違えられるのは馴れてい
るが、初めて会った女の子にそう言われると、やっぱりがつくりくる。マスターはそ
んなぼくの気持ちにかまわず、「おれも若い女の子から可愛いと言われてみたいよ」
と大きな手でぼくの頭を軽く叩いて笑い、「おっと、もう時間だ。さきに二階に上が
って待っててくれ」と言った。

映画が始まったが、女の子たちのせいで、ぼくはいつものように画面にのめりこめ
なかった。相変わらず熱い刷毛が皮膚の裏側をくすぐるうえ、薄闇の中を漂う彼女た
ちの息づかいや汗の匂い、シャンブーの香りなどが気になって落ち着けなかった。と
りわけ、ぼくや彼女たちと同じ年頃の男女のベッドシーンでは、ノゾキをしている現